

# 筑波大学新聞

第384号

編集責任  
筑波大学新聞  
編集委員会

TEL・FAX 029(853)6699

E-mail  
shinbun@  
un.tsukuba.ac.jp

発行所  
筑波大学  
茨城県つくば市  
天王台1-1-1

## マレーシア校開校 日本型高等教育の海外展開



マレーシア校1期生として入学した学生と日マ両政府の関係者ら(9月2日、筑波大マレーシア校で)＝川畑悠成撮影

【クアラルンプールで本紙取材班】筑波大は9月1日、海外分校をマレーシアの首都クアラルンプールに開校した。海外で日本の学

位を授与する初めての大学紙取材班が、同日には開校式と入学式が行われ、1期生はマレーシア国籍7人と日本国籍6人の計13人。

分校は国立マラヤ大学の敷地内にあり、開校にあわせて「学際サイエンス・デザイン専門学群」が新設された。新学群では、データサイエンスを軸として自然科学から人文社会科学まで幅広い分野を学ぶ。授業は英語と日本語で行われ、体育も必修となるのが特徴の一つだ。

入学式では、永田恭介学長が「日本の伝統や文化をマレーシアと共有する機会になる。両国が教育分野で協力することは新たな教育システムを作るための冒険になる。卒業生が世界の社会・環境課題を解決していくことを期待する」とあいさつした。

また、来賓のメガット・マレーシア高等教育副事務次官は「マレーシア国内の教育をより高く、豊かな環境にすることに貢献してほしい」と期待を寄せた。マレーシア人で、地元の大学を卒業後に入学したア

フィア・アブドル・ザキ(21)は「教員の専門分野が多様なことに引かれて入学した。同級生とのディスカッションの授業が楽しかった。将来は日本とマレーシアの懸け橋になりたい」と抱負を語った。

分校は同国のマハティール首相(当時)が2008年に来日した際、安倍首相(同)に日本型高等教育機関の設置を要請したことをきっかけに構想された。マハティール氏は分校を同日に訪問し、「日本語だけでなく、日本人の勤勉さや規律も学んでほしい」と学生らを激励した。

新学群について学群長の辻村真貴教授(生環系)は「身の回りの問題を起点として学びを進めていくカリキュラムを作った。自分で課題を設定し、解決できる能力を持った学生を育てていきたい」と本紙のインタビューに答えた。

## 三井住友FGと連携協定

筑波大と三井住友フィナンシャルグループ(FG)は8月1日、包括的連携協定を結んだ。国からの交付金が減額される中、「金融と知」を用いて大学の運営基盤を強化し、人材育成やスタートアップ支援、大学業務のデジタルトランスフォーメーション(DX)などに取り組む。将来的には大学と金融機関の連携を先導するモデルとして、全国展開を図るといふ。

## 「金融と知」で運営基盤強化

筑波大東京キャンパス 調印式が行われ、永田恭介学長と同FGの中島達社長が出席した。(東京都文京区)で同日、学長と同FGの中島達社長が出席した。連携協定は①財政基盤の

強化を含む大学経営の高度化②新しい共同研究・事業化③システムの開発④教育・研究、ビジネスを多角的に動かす人材の育成⑤スポーツの活性化と関連領域の取り組み強化⑥インクルーシブ教育の推進⑦の五つの領域に及ぶ。

財政基盤の強化では、同FGのノウハウを利用しながら、大学経営に必要な外部資金の獲得や資産の有効活用を進める。

学内のキャッシュレス化やDXも進める。同FGが提供する総合金融サービス「Olive」を導入し、学生や教職員が銀行や証券、保険などの金融サービスを一つのアカウントで完結できるようにする。さらに、DX導入で、筑波大附属病院の受付や支払いなどが、総合的な知を有す

の業務も効率化する。企業などとの共同研究でも活用し、最適なマッチングを進めることが検討されている。筑波大発のスタートアップ支援でも、効果的な資金調達などができる環境を整える予定だ。

調印式後の記者会見で中島社長は「社会的課題の解決には、総合的な知を有する大学との連携が欠かせない。筑波大と共に地域創生や教育に携わり、日本の再成長に貢献したい」と語った。

永田学長は「大学は経営体としてまた金融や産業に疎い。金融のプロの手を借りることで変革を進め、社会とより密接に結びついた大学にしていきたい」と今後の展望を述べた。



決勝で攻め手を緩めず相手に向かう永瀬＝松尾/アフロスポーツ提供

## 五輪・パラで筑波大勢が活躍 柔道永瀬が連覇 パラ柔道瀬戸も金

パリ五輪(7月26日～8月11日)とパリパラリンピック(8月29日～9月8日)で筑波大勢が大活躍を見せた。在学生ではパラリンピックの柔道男子73kg級(弱視)で瀬戸勇次郎(九星飲料工業・体育P2年)が金メダルを獲得した。また、卒業生では永瀬貴規(旭化成・平成27年度体育専門学群卒)が柔道男子81kg級で東京五輪に続いて優勝した。同階級の連覇は日本人初の快挙。永瀬は同混合団体でも銀メダルを獲得した。(山本貴世/国際総合学類2年、5面に関連特集)

永瀬は本紙の取材に「連覇という自身の目標はもろろ、周囲の期待に感じるためにも3年間練習に励んできた。結果が出ない苦しい時期もあったが、持っている力を出し切れた」と振り返った。

瀬戸は「金しかないという気持ちで練習してきた。表彰台に上がった瞬間、涙がこぼれた」と話した。この他、五輪では森秋彩(体専3年)がスポーツクライミング女子複合で4位に入賞。アーティスティッククライミング(AS)の佐藤友花(同4年)はチームで5位、デュエットで8位入賞した。卒業生では高橋健太郎(ジェイテクト・平成28年度体育専門学群卒)が男子バレーボールで7位となった。清家貴子(プライトン・平成30年度同卒)、

子育てと教育 市民が議論	2
「どうぶつとみんなのいえ」開園	3
剣道 松崎団体世界一人2位	10
卓球 初のインカレ団体優勝	11
スタバで活躍 聴覚障害の渡邊さん	12
注目記事	
パリ五輪・パラ特集	
躍動した選手に迫る	5
本紙創刊50周年特集	
本紙の歩みと学生生活	6・7
編集長座談会・アンケート	8・9



新聞紙に見える耳がデザインの特徴だ  
3年)編集部長と橋本さんが

創刊50周年企画  
マスコットキャラクター決定  
名称を公募へ  
本紙は創刊50周年を記念し、公式マスコットキャラクターを決定した。本紙を紙面や本紙の公式SNS(ネット交流サービス)などで活躍する予定だ。デザインを担当したのは橋本萌花さん(芸専3年)。編集部長と橋本さんが

南朝華(ASローマ・令和2年度同卒)熊谷紗希(同・同中退)、千葉玲海菜(アイントラハト・令和3年度同卒)が代表入りした女子サッカーは5位だった。パラリンピックでは、カヌー女子カヤックシングル200kg(運動機能障害者K1)に出場した瀬立モニカ(パラマウントベッド・令和3年度同卒)が6位、た尾縣真教授(体育系)は帰国会見で「選手たちの活躍が多くの人にスポーツの魅力や感動、オリンピックの価値を届けられたらうれしい」と話した。

筑波大の在校生と卒業生、附属学校の在校生と卒業生は五輪、パラリンピック合わせ金メダル4個、銀メダル1個を獲得したのをほめて延べ25人が入賞した。

マレーシアの名物料理「クサ」との出合いは衝撃的だった。首都クアラルンプールで食べたラクサは魚介ベースのだしに酸味と辛味が効いたスープが特徴だったが、その辛さに閉口した。これから10日間もこんな独特な料理を食べるのと思うと気が滅入った▼9月に開校した筑波大マレーシア校の取材で現地を訪れた。初めての海外取材だったが、初日の食べ物への印象は、その後、全く変わった。同校の職員から近くにある食堂を教えてもらったことがきっかけだった▼その食堂は自分で皿を持ち、料理を取りに行くスタイルで、肉料理や魚料理のフライ、野菜炒めなど50種類ほどの現地料理が置かれていた。鶏肉を使った料理

# 子育てと教育巡り議論

## つくば市民ら立場超え

「つくば子育て&教育サミット」(つぐはくサミット)が7月15日、茗溪学園中学校高等学校(つくば市稲荷前)で開かれた。つくば市内の教員や子育て中の市民ら約80人が参加し、意見を交わした。行政の管轄が分かれる子育てと教育について、子どもの保護者や現場、行政機関の関係者が立場を超えて語り合う機会を設けようとして、筑波大学の学生や卒業生で作る同サミット実行委員会(竹之内大輝実行委員長)が主催した。

同サミットは「多様化する子育て支援」「子どもにとっての『最善』とは?」「放課後」がもつ可能性、「つくば市からみる教育の未来」の四つのセッションに分けて進められた。

各セッションとも、テーマに関連するNPOのメンバーらが登壇し、現場体験

など踏まえながら議論を展開。その後は、来場者が5人程度のグループに分かれて同じテーマについて意見交換し、議論をさらに深めた。

来場者は無料通信アプリ「LINE(ライン)」のオープンチャット機能を使い、サミット中に意見を自由に投稿、共有できた。

「子どもにとっての『最善』とは?」をテーマにした第2セッションでは、少



ステージ上で意見を交わす登壇者ら(7月15日、茗溪学園中学校高等学校で) = 横山心咲撮影

年院の法務教官として非行少年の更生に携わった経験を持つ公認心理師の安部顕が「子どもが求めているのは自分で決めること。その子

にとってそれが最善かどうか分からなくても、尊重しなくてはいけない」と話した。

「つくば市からみる教育の未来」がテーマの第4セッションでは、同市教育委員会の森田充教育長がヒアリング講演。「保護者、学校、地域、行政が協力して子どもを育てる」など同市が目指す教育の在り方について語った後に、高校生と大学生ら計5人が登壇。このうち、茗溪学園高3年の依田葉月さんは、「どのような居場所があったら、子どもにいいと思うか」とのオープンチャットからの質問に、「自分たちで過ごし方を自由に考えられる場所がある」と答えて

**筑波大学 新刊案内**

**東アジア冷戦文化の系譜学**

——一九四五年を跨境して——

越智博美・齋藤一・橋本恭子・吉原ゆかり・渡辺直紀 編

冷戦という(戦争)において情報戦の武器であった「文化」は、いかに政治的・文化的・社会的機能を果たしたのか。冷戦期の米国の影響が色濃い東アジアを中心に読み解く。

◆ A5判並製、478頁。4月19日刊行。7810円(税込込み)。

朝永振一郎記念「科学の芽」賞の受賞作品集第9弾。今回は第17・18回(令和4・5年)の受賞作品や過去に受賞した先輩研究者からのメッセージを収録。

◆ B5判並製フルカラー、202頁。6月19日刊行。3300円(税込込み)。

筑波大学出版会は常勤の教職員を対象に新規企画を募集しています。詳細は出版会HPで。

# ウェルビーイングルーム

## 春日エリアに開設 心身緩めて



リラックスできる環境が整備されている部屋(8月6日、7B棟で) = 川畑悠成撮影

春日エリア7B棟の「ウェルビーイングルーム」210号室が今年7月、としてオープンした。ハン

モックやビーズソファなどが置かれ、利用者は寝そべって自由に時間を過ごすことができる。開室は平日の午前9時から午後6時まで、毎日数人が利用しているという。

ウェルビーイングルームは広さ67平方メートル。利用者は靴を脱いで入室する。電子機器の利用は禁止された。緑を基調とした内装が施され、テーブルやビーズソファ付きのソファ、揺れる椅子なども置かれている。

学生たちが心身を緩められる、静かで穏やかな空間を設けたいと松原正樹准教授(図情学系)が発案し、実現した。松原准教授は多くの情報が身近にあふれる現代では、自分について考える時間が減っている。自分自身の良い在り方(ウェルビーイング)を見つめ直す空間として活用してほしいと話した。

同室を利用した知識情報・図書館学類2年の男子学生は「勉強の場である大学で、休息の取れる部屋ができたことに驚いた。普段はスマートフォンやパソコンから離れてゆっくりできる場所がないが、ここではゆとり過ごすことができ、読書の場として活用している」と話した。

今後は部屋の中心に大きな火を模したインテリアを設置し、定期的な呼吸法や瞑想に関するイベントを開催する予定だ。(金慧欣)



「今年のはいつもより静かだ。」

「博士号」

「もう秋か。」

# Hello!

## 先端研究



松井崇助教

コンピュータゲームで競い合うeスポーツは障害の有無や年齢を問わず楽しめるインクルーシブスポーツとして注目を集めている。ただ、長時間続ける、体は疲れを感じていなくても、脳の判断力が低下する認知疲労が生じてしまうことを、松井崇助教(体育系)らの研究チームが明らかにした。さらにeスポーツ中の瞳孔の大きさの変化が、自覚しにくい認知疲労を検知する指標となることを示した。

# 脳の疲労を瞳孔収縮から検知

## eスポーツのやりすぎ防止へ

松井助教らの研究で、柔道の稽古をする、オキシトシというホルモンの分泌が高まることなどが分かっている。出産や授

参加者 カジュアルプレーヤー (n=14) / ハードコアプレーヤー (n=19)

eスポーツプレー / 認知課題

eスポーツ及び認知課題を行う実験の様子

松井助教提供

松井助教は今後、認知疲労を検知して自動的にプレーを中断できるシステムの開発にも取り組む予定で、「認知疲労の予防につながる運動や栄養の戦略を作り、eスポーツを運じたウェルビーイングの向上に寄与したい」と話している。(野田健祐 応用理工学類4年)

感じにくい分、長時間プレーをしがちなりやすいことが、eスポーツの問題となっていた。そこで松井助教らは、eスポーツを長時間プレーすると、体の疲労感が高まる前に認知疲労が生じているという仮説を立てた。そして、この仮説を検証するため、eスポーツにバーチャルサッカーを用いた実験を行った。実験には、普段からバーチャルサッカーを楽しんでいる筑波大生14人(カジュアルプレーヤー)と、大会で勝つために毎日バーチャルサッカーをしているトップ選手ら19人(ハードコアプレーヤー)が参加した。

参加者には合計3時間プレーしてもらい、脳の活動の指標としてプレー中の瞳孔の大きさの変化を計測し続けた。また、プレー前と開始から1時間ごとに自らの疲労感を評価してもらい、併せて認知疲労をチェックするテストを実施した。

その結果、プレー経験に関係なく、参加者はプレー開始2時間後まで疲労を感じていなかった。一方、開始2時間後の時点で、二つのグループと

も認知疲労を調べると、その成績は低下した。さらに、瞳孔の大きさも縮小していた。

これらの結果は、体の疲労感が高まる前に認知疲労が生じているという仮説が正しく、瞳孔の縮小が認知疲労の検知に有効なことを示している。

eスポーツによる疲労防止に加え、パソコンに向かって仕事を続けるオフィスワークでの疲労防止などにも活用できる成果だ。

**もっと知りたい!**

**「科学の芽」の世界 PART9**

筑波大学長 永田恭介 監修 / 「科学の芽」賞実行委員会 編

朝永振一郎記念「科学の芽」賞の受賞作品集第9弾。今回は第17・18回(令和4・5年)の受賞作品や過去に受賞した先輩研究者からのメッセージを収録。

◆ B5判並製フルカラー、202頁。6月19日刊行。3300円(税込込み)。

筑波大学出版会は常勤の教職員を対象に新規企画を募集しています。詳細は出版会HPで。

# どうぶつとみんなのいえ オープン

## 霞ヶ浦 動物や自然との共存考える

「霞ヶ浦 どうぶつとみんなのいえ」が7月31日、茨城県行方市玉造甲の霞ヶ浦ふれあいランド内に開館した。カビバやアルパカ、ペンギンなど約19種、80頭の多彩な動物や生き物が暮らし、秋以降にはキリンも仲間に加わる予定だ。運営主体でアニマルカフェなどを全国展開する「MOFF」(本社・同県石岡市)の担当者は「こでの体験を動物や自然との共存を考える機会にしてほしい」と話している。(兼平麻史)



柵やガラスなしで動物と触れ合える展示(9月14日、霞ヶ浦 どうぶつとみんなのいえ) = 兼平麻史撮影

同施設は、2020年にリニューアルした。壁や柱で残しながら増築し、遺跡閉館した「水の科学館」などをあえて一部壊した形と位置づけ、再生させたデザインになっている。同市は閉館した「科学館」を取得。MOFFが設立した「霞ヶ浦ふれあいランド」と約19億円の事業契約を結び、周辺に立地する展望塔や観光物産館などの一体運営を委託していた。オープンした施設の敷地は約2万平方メートル。暮らししている動物は敷地内を自由に動き回っており、動物と触れ合いながらおやつを与えられることもできる。今後予定されているキリンの展示では、見学者が地面や施設階の通路からキリンと同じ目線で観察できるようにするという。また、ここで暮らす動物や自然環境に関する本を自由に読める図書館、入園料不要で利用できるテラスなども設けられた。

同施設を設計した建築家の高橋一平さんは「使う人の固定概念を壊されるような場所を目指した。テラスで自習をするために来てもらってもいい。さまざまに目的を持った人が集まることで、開かれた学びの環境が作られる」と話した。入園料は高校生以上1650円(税込)、4歳から中学生1100円(同)。水曜日休園。

# 「バッハの森」で合唱披露

## 教会音楽の背景学び

聖書と教会音楽の学びの場を提供する私塾「バッハの森」のワークショップ参加者による音楽会が7月28日、バッハの森記念音楽堂(つくば市東光台)で開かれた。約30人の聴衆が、奏



パイプオルガンを背に歌う参加者たち(7月28日、バッハの森記念音楽堂)

楽堂のパイプオルガンと合唱の響きを楽しんだ。「バッハの森」は1985年、聖書学者の石田友雄・筑波大名義教授と妻でオルガニストの故・石田一子さんの呼びかけに賛同した市民有志により、つくばの地に創設された。参加は会員制で、合唱やオルガンの実技、聖書研究、ドイツ語・ラテン語による歌詞研究など幅広いコースが用意されている。

ワークショップは石田名誉教授の友人で独ハンブルク音楽芸術大学教授のヤン・エルンストさんと音楽家のマイケル・ツヴァルトさんが6年ぶりに来日するにあわせて企画された。ワークショップの参加者は約20人。コンサート前日と当日に2人の指導を受け、バッハの音楽曲(カンター

タ)を中心に学んだ。音楽会は2部構成。第一部「主の憐れみ」では、ワークショップの課題曲だったカンタータ「主は私の誠実な羊飼い」(バッハ作曲)の合唱を披露。参加者は体でリズムをとりながら、招かれたソリストと共にのびやかな歌声を響かせた。

第二部「音楽の贈り物」では、ヤンさんが企画したプログラムが演奏された。「彼は羊飼いのようにその群れを飼い」(ヘンデル作曲)やドイツ語によるルター派の讃美歌「コラール」が披露された後、バッハの

カンタータで締めくくられた。声楽ソリストの力強い響き渡り、聴衆を圧倒した。音楽会全体を通してテーマは「羊飼い」。神を羊飼いの、人間を羊に例える詩篇23番の歌詞を第一部・第二部の両方で歌うことにより、プログラムに連続性を持たせた。石田名誉教授は「バロック時代の宗教音楽やその背景にある聖書文学の教育・研究活動を通じ、日本の精神文化の振興に貢献したい」と約40年間活動してきた。今回の音楽会の演奏は素晴らしい理解に基づいて、教会音楽を知ってもらう機会になった」と話した。(松尾有姫)比較文化学類1年 写真も)

# つくばンサマーコンサート

## 今年度初の単独公演 新人生迎え

筑波大学混声合唱団のコンサートが9月1日、アルスホール(つくば市吾妻)で開かれた。約50人の観客に、リズムやテンポの異なるバラエティーに



演奏が終わっても熱気が会場に残った(9月1日、アルスホール) = シダス・ポーター撮影

富んだ9曲を届けた。コンサートは全4ステージ構成。同団が歌い継いできた筑波大の学生歌「常陸野」で幕を開けた。会場はまとまりのあるハーモニーで包まれた。第二ステージでは、女性を口説こうとする男声パートとそれをかわす女声パートの掛け合いが特徴のドイツ歌曲「Neckerei」(からかい)、「フレイム」を披露。曲のテンポが速くなるにつれて男声パートと女声パートが次第に重なり合い、軽快ながらも情熱的な歌唱で聴衆を魅了した。

コンサートのトリは、酒をたしなむ楽しさや喜びを表現した「酒頌」(上田真樹作曲)。「乾杯」という威勢良い歌声で盛大に曲が締めくくられ、終演後も会場の熱気は冷めやらなかつた。団長の又井陽世里さん(知識3年)は「新入団員を迎えて初めての単独コンサートだった。各曲の魅力

# つくコレ 男女枠廃止

## 「カラフルな個性発揮を」

今年で50回を迎える筑波大学学祭(雙峰祭)の恒例イベント「TSUKUBA COLLECTIO N(つくコレ)」のウェブサイトで紹介されている。ファイナリストへの投票は、同サイトで11月3日午後11時59分まで受け付けている。同日午後には、ファイナリストが石の広場でパフォーマンスを披露する。学芸委でつくコレの企画長を務める山口春樹さん(知識2年)は「魅力的な身のカラフルな個性を存分に発揮してほしいとの願いを込めた」と話している。ダブル最終日の11月4日、グランプリ、準グランプリ各1人が決定する。(横山心咲)

# 短歌 筑波大



昨年10月、筑波キャンパスで

あざつゆにひかりはさして 汝の色として咲きゐる 曼珠沙華

曼珠沙華は梵語で「天上に咲く赤い花」を意味する「Majusaka」の音写が語源とされ、姿や開花時期から、地獄花、死人花、彼岸花という不吉な異名を持つ花だ。しかし、彼岸過ぎに一斉に群れる花々の荘厳さにはいつも心が奪われる。すらりとした茎を追えば、その先には鮮紅の一輪、美しい造形の花が咲いている。この花、語られる不吉さとは裏腹に、仏教では釈尊が法華経を説いた際、天上よりもたまたま四華の一つとされる。圧倒的な美しさにはやはり「畏」を感じるものだ。(東風えまり)比較文化学類3年

# 『旅をする木』

星野道夫著

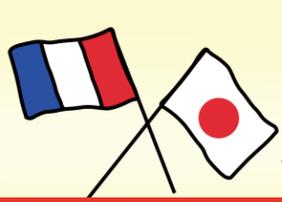
1952年生まれ。73年の21歳の時にアラスカに渡り、96年クマに襲われて急逝する。この本はアラスカの自然と人々に対する愛情、自然と人々と交流する幸福感であふれている。美しい自然の描写、人々との温かいやりとり、本質に迫るような言葉は、私を別世界に連れ去り、日常生活の捉え方を変えてくれた。例えは、星野はマッキンレー山の氷河を旅する。動くものも音もない。月光に浮かび上がる氷河と星の世界。そこできっと情報があふれるような本と出会った。著者の星野道夫は写真家である。スキーを履いて、犬ぞりに乗って、セブナに乗って、アラスカ中を旅し、自然と人々を写真に撮り、本を書いた。星野の行動力にも憧れを抱いた。星野は古本屋で二冊のアラスカの写真を購入する。そこに写っていたのは北極圏のエスキモーの村。自分がかつて生きていた時間とこの人たちが生きていたことを考える、いてもたってもいられない。村に手紙を書くのである。「何でもしますので、誰かほくを世話してくれる人はいないでしょ



寺内大左 准教授 (環境人類学) 人文社会系・准教授。東京大学大学院農学生命科学研究科・博士課程単位取得退学。博士(農学)。2021年より現職。



# 4年に1度の特別な舞台 パリ五輪・パラリンピック



【一面参照】パリ五輪・パラリンピックでは筑波大勢が躍動した。その中から5人の選手の活躍を紹介する。また、競技役員やスポーツ医としても多くの筑波大関係者が選手たちをサポートした。教員2人による活動などについて聞いた。(兼平麻央、横山心咲)比較文化学類、山本貴世(国際総合学類、壬生奏太(地球学類))

## パラ柔道

9月6日に行われたパリ五輪パラリンピック男子73kg級(弱視)で瀬戸勇次郎(九)が金メダルを獲得した。筑波大は「3年間練習して(弱視)で瀬戸勇次郎(九)が金メダルを獲得した」と喜びを語った。



出足で決勝を制した瀬戸=アフロスポーツ提供

金メダルを獲得した。東京大会で銅メダルだった瀬戸は「次は金メダルしかないと考えて3年間練習して(弱視)で瀬戸勇次郎(九)が金メダルを獲得した」と喜びを語った。

## 柔道



永瀬貴規(松尾提)

7月30日に行われたパリ五輪の柔道男子81kg級で永瀬貴規(旭化成・平成27年度体育専門学群卒)が金メダルに輝き、東京に続く連覇を達成した。選手層が厚く、「激戦区」と呼ばれる同階級の五輪連覇は日本人初の快挙だ。「東京後はなかなか結果が出ず、自分の柔道を見失った時期もあったが、周囲のサポートも得ながら、もうひと踏ん張りと言いつつ練習に励んだ。自分の力を出し切れた」と喜びを表した。

## 永瀬初の連覇

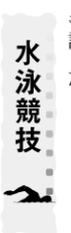
永瀬は初戦の2回戦から準決勝は合わせ技一本で勝利し、決勝では世界選手権3連覇のタト・グリガラ(シビリ(ジョージア))と対戦した。難敵にもひるむことなく、得意の組み手で相手をコントロール。開始2分目に谷落で技ありを奪い、その約40秒後には同じ谷落で見事に一本を奪った。

だが、開始6秒に背負投で技ありを奪うと、その約40秒後にも出足で技ありを決め、合わせ技一本で金をつかみ取った。

## 金越え階級

階級が下がったが、1階級上の73kg級への変更を強いられる。筑波大大学院に進学した昨年からは、つくばを拠点に「フィジカル強化に取り組んだ」という。

## 水泳競技



佐藤友花

パリ五輪のアーティスティックスイミング(A.S.)で佐藤友花(体専4年)はチームとデュエットに出場したが、開始6秒に背負投で技ありを奪うと、その約40秒後にも出足で技ありを決め、合わせ技一本で金をつかみ取った。

## 底力リードで4位

世界に印象付けた。森は「表彰台に乗れたらうれしかったが、今の自分にとっては妥当な結果だ」と語った。

## クラスポーツ

パリ五輪スポーツクライミングの女子複合は8月10日に決勝が行われ、森秋紗(体専3年)は4位となった。

## 高橋 攻守に貢献

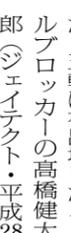
5日の準々決勝ではイタリアと対戦。高橋はこの試合、アタックで5得点を挙げ、攻撃でも貢献した。

比嘉とのペアが決まったのは今年5月で、調整に苦労したという。「大会を通じて、技の難度より質を追求すべきだと気付いた。五輪前は引退も考えていたが、さらに演技を磨きたくした。」

## バレー

パリ五輪の男子バレーボールで日本は7位入賞した。五輪に初出場したミドルブロッカーの高橋健太郎(ツエテクト・平成28年度体育専門学群卒)は、2022年の長身を生かして攻撃に活躍した。「東京五輪に選ばれたのは悔しさを胸に、体力や肉體面を強化した」という。

## 選手団ドクター



半谷美夏先生

世界トップレベルの舞台で戦う選手らにとって、けがは避けられないもの。パリ五輪では18人の医師が日本代表選手団に加わり、筑波大関係者がそのうち5人と大きな存在感を示した。

## 選手団長

尾縣教授の話。パリ五輪・パラリンピックには、選手35人と選手団役員や監督・コーチ、チームドクターなどスタッフ60人以上の筑波大関係者が参加した。

## 尾縣教授の話

尾縣教授は「選手35人と選手団役員や監督・コーチ、チームドクターなどスタッフ60人以上の筑波大関係者が参加した。パリ五輪の日本選

## 高橋 攻守に貢献

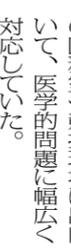
5日の準々決勝ではイタリアと対戦。高橋はこの試合、アタックで5得点を挙げ、攻撃でも貢献した。

「目標だったメダル獲得はかなわなかったが、大きな舞台を経験し、精神的に強くなった。今後はSVリーグでの優勝を目標にしていきたい」と語った。

## 選手団ドクター

トする本部ドクターがいた。本部ドクターは、選手村に設けられた日本選手団の医務室や競技現場に向いて、医学的問題に幅広く対応していた。

## 選手団ドクター



半谷美夏先生

このように、五輪・パラリンピックでは、出発前から大会期間中を通して選手・スタッフに対し医療をほじめてきた。また、スポーツドクターは、診療やメディカルチェック、海外遠征への帯同、競技会場の救護などさまざまな形で選手に関わっているが、日本では病院などの内科や歯科の観点から一般の医師としての業務を行った上で、スポーツに関する活動をしている者がほとんどだ。

## 選手団ドクター

尾縣教授は「選手35人と選手団役員や監督・コーチ、チームドクターなどスタッフ60人以上の筑波大関係者が参加した。パリ五輪の日本選

## 選手団ドクター

尾縣教授は「選手35人と選手団役員や監督・コーチ、チームドクターなどスタッフ60人以上の筑波大関係者が参加した。パリ五輪の日本選

## 選手団ドクター

尾縣教授は「選手35人と選手団役員や監督・コーチ、チームドクターなどスタッフ60人以上の筑波大関係者が参加した。パリ五輪の日本選





# 関係者に聞く

# 筑波大学新聞の歩み

本紙は半世紀にわたって筑波大の「今」を伝え続けてきた。紙面には歴代の編集部員たちの思いが色濃く投影されている。その舞台裏にはどんなドラマがあったのか。紙面製作に携わってきた関係者4人の証言から、編集部これまでの歩みを振り返りたい。

(川上真生) 社会学類、結城希 国際総合学類、川畑悠成 知識情報・図書館学類

## 手探りだった 創刊当初

初代編集部長の安藤弘一さん(68)は昭和53年度人文学類卒。1期生が入学した1974年当時、多くの建物はまだ建設中、完成していたのは体育芸術棟(現5C棟)くらいだった。同年10月の開学記念式典を学



創刊当初の苦勞を語る安藤さん(7月30日、東京都新宿区) = 山本貴世撮影

## 鉛の活版で印刷

紙面の製作方法も、デジタル化された現在とは大きく異なる。印刷は常陽新聞(茨城県土浦市、後に廃刊)にお願いしていた。出来上がった手書きの原稿をレイアウトしたものを渡し、鉛の活版に組んでもらった。初めはレイアウトの規則も知らず、大変だった。

## 「青春の場だった」

本紙元編集長の松本果奈さん(34)は平成25年度人文学類卒。2011年に編集長を務めた。学生が主張できるコーナーを設けようとして、第302号(12年9月)から学生の顔写真と署名付きで意見を主張する「記者の声」を始め、初回を担当した。題材としては祖母がいた福島県相馬地方の伝統行事「相馬野馬追」だ。

## 本紙で被災地への貢献を模索



松本果奈さん

前例がないので執筆に苦勞したが、震災からの復興を願う気持ちを伝えることができた。印象に残っているのは、第300号(12年5月)だ。発行直前につくば市で震災が発生し、編集室も一時停止した。死傷者が出るなど大きな被害を受けた北条地区を緊急取材し、被害を一面トップで報じた。次の災害を防ぐにはどうすべきかを考えて取材した。



前田秀雄さん

本紙が現在の題字になったのは第5号(1975年6月20日発行)から。揮毫したのは芸術専門学群1期生だった前田秀雄さん(68)は平成元年度芸術学道教室を開く前田さんは「大学に入って間もない時期に書いた字なので少し恥ずかしい気持ちもあるが、50年間使われてきたことほめてもらいたい」と話している。



第1〜4号まで使用されていた題字(左)と前田さんが揮毫した題字

当時、新聞の題字には左右に波打つような書体の特徴の隷書体が使われることが多かったが、高校時代の書道の恩師から指導を受けた木簡の書体を使うことを思いついた。締め切り前日、一気に書き上げ提出したところ、当時の編集部の判断で採用が決まったという。「細い木片に書かれた木簡の書体は、題字のスペースに6字がピッタリと収まった。創刊100周年を目指して頑張っていた」と前田さんは本紙にエールを送った。

## 他にない書体使い

前田さんは書道専攻。入学直後の75年5月、同専攻の学生を対象にコンペティション形式で題

## 大学の歴史を刻み続ける

は、学生が執筆する記事を増やした。現在まで続く「一面のコラム『筑波おろし』」を始めたのも同号からで、その執筆を担当した。当時、大学周辺には学生街と呼べるような場所がなく、宿舎で友人と会話することが楽しかった。筑波大を「砂漠の真ん中にある町」と例えて、文化的刺激のない環境を皮肉った覚えがある。

## 筑波大学新聞綱領

一、新大学にふさわしい学风の高揚と高い大学文化の創造に貢献することを目的とする。

一、言論の自由を守り政治的、思想的に中正公明の立場を堅持し、全大学の立場に立って真実を追求しこれを報道する。

1975年に策定された筑波大学新聞綱領

## 継続的な発行体制目指し

半世紀の間、発行を継続してきたことは誇れることだ。時代によって大学の立場に立つこと、誇れることだ。時代によって



本紙の縮刷版を見て当時を懐かしむ天野元教授(左)と荻野元教授(9月10日、千葉県市川市) = 川上真生撮影

本紙の活動は「リベラルアーツ」の実践だ。最先端の研究をする教員や五輪のメタリスト、芸術を学ぶ学生などこれほど取材対象が幅広い大学は少ない。その価値を高めながら取材してほしい。(聞き手・結城希)

ある「週刊朝日」編集長(当時)の扇谷正造さんから「新聞で重要なのは継続性と正確性だ」とよく激励された。扇谷さんは週刊誌という形態を確立させた著名ジャーナリストで、その教えが紙面改革の背景にある。

## 「5人時代」 乗り越えた

2008〜12年に編集委員長、編集代表を務めた荻野元教授(78)は、編集委員をして毎日本新聞を定年退職後の新入部員6人が加わって、津田幸男教授(当時、人文社会科学研究所)による「大学にスターバックスは必要か」との問題提起から始まった。中央図書館内へのスターバックス設置について教員・学生の意見を掲載し、紙面が活性化した。

## 締め切り直前は夜中まで

加えてマスコミ志望の学生向けに作文指導もしていた。現代語・現代文化学系教授だった青木彰先生が開いていた「青木塾」を引き継いだもので「天野子屋」と称していた。

本紙の編集責任者を新聞記者経験者が務める体制を整えたのは青木先生だ。産経新聞社などを経て78年に筑波大に着任し、大学の広報室長も兼任していた。私が編集委員長を務めたのも青木先生から推薦を受けたのがきっかけだ。

大学新聞には学内で起きていることを社会に発信する重要な役割がある。これからも学内の出来事を

大学新聞に学内で起きていることを社会に発信する重要な役割がある。これからも学内の出来事を

# 筑波大、日本大、東京大、一橋大 編集長らの考える大学新聞の使命は

本紙は創刊50周年を機に、創刊100年の歴史を持ち、学生が製作している三つの大学新聞の編集長らを迎えて座談会を開いた。話題は現在の課題から大学新聞の使命や在り方などに及んだ。【司会者は本紙副編集長・青野心平(物理学科)と各新聞の概要は別表の通り】(8月26日、筑波大東京キャンパスで開催)

## 学生の視点大切に

「どのような大学新聞でありたいか。どの再生が鍵となっていくか。一橋新聞を史料の一般紙では取り上げられない、学生の実感や学生の意見をとり上げていきたい。」



内田さん(一橋大)

「コロナ禍で編集会議がオンライン化し、部員同士の間が薄くなったことも課題だ。内田(一橋大) 学生が新聞をなかなか読んでくれない。学生が興味を持ってくれない記事は編集会議で選ぶが、紙面を配っても学生より地域の人が受け取ってもらうことが多いと感じる。松本(日本大) オンラインには速報性があり、多くの人が読んでもらえることが最大のメリットだが、自分からニュースを見なければならぬ。一方、紙面を定期購読しても



緒方さん(日本大)

「筑波時評というコーナーがある。イスラエルのガザ侵襲に反対する学生の活動なども紹介している。緒方(日本大) 社会問題が報じられていないことは反省点だ。教員に社会問題を論じてもらう企画はない。日本大の不祥事を学生の言葉で取り上げることや、学費値上げなど学生生活が変わるような問題を取り上げていきたい。赤津(東京大) 学内での出来事を報じれば、社会問題につながる。例えば東京大の授業料値上げ

## もっと反応がほしい

「それぞれの編集部で何が課題になっているか。青野 編集部員が減少傾向にあることだ。昨年までは毎月12面構成にしていたが、部員の作業量を考え、今年は8面構成を基本にした。学生からの反応があまりないことも課題だ。8月から中央図書館に自inboxを設置し、意見を募集しているが、まだ少ない。」

## 紙の新聞は残したい

「メディアのオンライン化が進んでいるが、紙面との共存は必要か。青野 現在は紙面発行とそのPDF版のウェブ掲載だけだが、今後は個別のニュースをウェブサイト

青野 本紙の編集編で掲げているように、学生・教職員のコミュニケーションの場として、確かな情報をお届けしていく。情報の真偽を担保されていないSNS(ネット交流サービス)と対比して、読者である学生から必要とされる新聞であり続けたい。緒方(日本大) 規模が大きい大学(全16学部、在学生約7万人)の一体化に向け、各学部の学生が他学部の情報を知り、交流を図れる紙面づくりが目標だ。生

赤津(東京大) 定期購読者数の減少が課題だ。読者を増やす機会だったオンラインパスがコロナ禍以降オンラインのみでの開催になったことが影響している。コロナ禍で編集会議がオンライン化し、部員同士のつながりが薄くなったことも課題だ。内田(一橋大) 学生が新聞をなかなか読んでくれない。学生が興味を持ってくれない記事は編集会議で選ぶが、紙面を配っても学生より地域の人が受け取ってもらうことが多いと感じる。松本(日本大) オンラインには速報性があり、多くの人が読んでもらえることが最大のメリットだが、自分からニュースを見なければならぬ。一方、紙面を定期購読しても

青野 社会で起きていることと学生は無縁でなく、身近に感じてもらうことは大切な。筑波大学新聞には教員に時事問題を専門的な視点から解説してもら

青野 社会で起きていることと学生は無縁でなく、身近に感じてもらうことは大切な。筑波大学新聞には教員に時事問題を専門的な視点から解説してもら

赤津(東京大) 学生が、未来について考えられるような情報を提供するのが一番の存在意義だろう。持続可能な新聞という点では、サークル活動の形なので、部員がやりたいことをやれるような組織にしていきたい。

内田(一橋大) 一橋大の教員や学生は社会科学に興味を持っている人が多い。社会問題を扱った記事が少ないことが読者離れの理由の一つかもしれない。社会問題に興味のある学生に読んでもらえる新聞を作りたい。

## 各新聞の概要と参加者

◆日本大学新聞(発行は日本大学新聞社) 1921年創刊。日本大学で唯一公認の大学新聞で、部員数は27人。年11回発行。発行部数は未公表。オンラインサイト「日大新聞オンライン」も運営。主な活動資金は購読料収入。参加者は編集長・緒方桃子さん、副編集長・小泉真太郎さん、社員・松本孝太さん。

◆東京大学新聞(発行は東京大学新聞社) 1920年創刊。東京大学新聞社は公益財団法人で運営資金は新聞の購読料など。部員数は約50人。月刊紙「東京大学新聞」とウェブメディア「東大新聞オンライン」を発行。「東京大を動かすメディア 東京大生のハブコミュニティ」を掲げる。参加者は編集長・赤津郁海さん、前編集長・本田舞花さん。

◆一橋新聞(発行は一橋新聞部) 1924年創刊。年6回発行で「一橋新聞」を発行。部数は750部。ウェブサイト「一橋新聞WEB」に紙面と同じ記事を掲載中。今年度からは最新号のPDF版も載せている。昨年度の部員は3人だったが、今年度は新たに8人が加わった。活動費は大学からの支援で賄う。参加者は部長兼編集長・内田耀大さん

◆筑波大学新聞(編集責任は筑波大学新聞編集委員会) 1974年10月創刊。今年度の紙面発行は計5回。1号当たり2万2000部発行。部員数は約20人。編集方針は「筑波大学新聞綱領」にのっとり。取材、記事執筆、編集作業まで全て学生が行い、印刷のみ外部委託している。活動費は大学から得ている。

## 大学批判には難しさも

「他大学に聞きたいこととはあるか。本田(東京大) メディアの役割として「公権力の監視」が挙げられるが、学生新聞は大学に根差したメディアであり、大学の不祥事を真向から批判することが難しい部分がある。そのような時にどのような報道姿勢を決めているのか。青野 筑波大学新聞は教職員で組織する編集委員会の下に置かれている。不都合な内容をチェックするだけでなく、紙面が綱領にのっとっているかを確認するため、メディアとして伝えるべきことは伝えるという姿勢は守っている。」

緒方(日本大) さまざまな不祥事があった中で、取り上げないニュースもあった。その反省から、大学の不祥事に対しても毅然とした態度で立ち向かう信念は持っている。大学から記事の内容について注文が出ることもあるが、独立した機関として大学・学生の意見を反映するということを心がけている。内田(一橋大) 大学に

「大学新聞の使命や在り方をどう考えているか。本田(東京大) 「大学をもっと批判すべき」という意見をもろうことがある。しかし、大学にも学生にも過度に寄り過ぎず、どこからでも独立した状態で、伝えるべき情報を網羅的に集めることを報道姿勢にしてい

赤津(東京大) 学生が、未来について考えられるような情報を提供するのが一番の存在意義だろう。持続可能な新聞という点では、サークル活動の形なので、部員がやりたいことをやれるような組織にしていきたい。

内田(一橋大) 一橋新聞は100年の歴史を持つが、戦時下に一時発行が途絶えた。過去紙を読むと、戦況が激しくなるにつれ、圧力に屈して迎合したような記事が見られる。この先どのようなことがあるかわからないが、学生の視点を忘れてはいけない。大学の広報機関とは一線を画した記事を書くようにしていきたい。



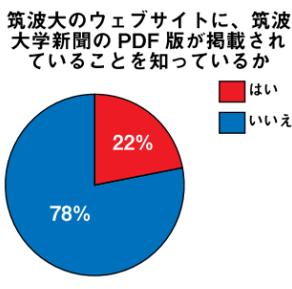
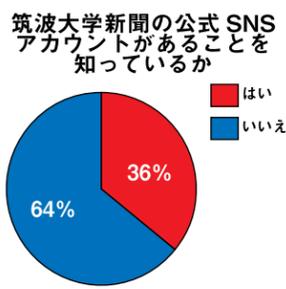
松本さん(日本大)

松本(日本大) どの大学新聞も学生が企画・運営して記事執筆している。内田(一橋大) 一橋新聞は100年の歴史を持つが、戦時下に一時発行が途絶えた。過去紙を読むと、戦況が激しくなるにつれ、圧力に屈して迎合したような記事が見られる。この先どのようなことがあるかわからないが、学生の視点を忘れてはいけない。大学の広報機関とは一線を画した記事を書くようにしていきたい。

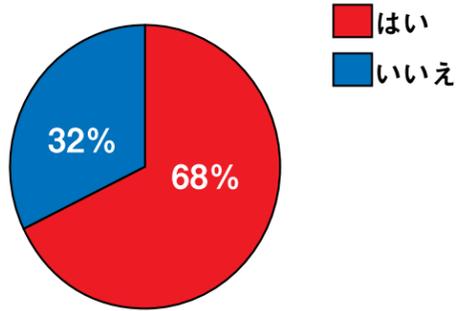
# 筑波大生アンケート 本紙のこれからを考える

筑波大生は本紙にどんな記事を読んでいるのか。そもそも本紙は多くの学生に読まれているのか。印刷した紙面中心の発行形態のままよいか。こうした問いに対する答えを探るため、本紙は創刊50周年を機にアンケートを実施し、筑波大生100人からの回答を得た。回答者の73%が本紙を「必要」「どちらかといえば必要」と答えた。ほしい情報は「日々の生活」や「筑波大生の活動」が上位を占めた。アンケートの詳細と、本紙の在り方を巡る有識者へのインタビュー結果を紹介する。(大竹翔二文学類、兼平麻央、横山心咲比較文化学類、毛利嘉宏II応用理工学類、金慧欣II知識情報・図書館学類)

## 「大学新聞は必要」が7割超

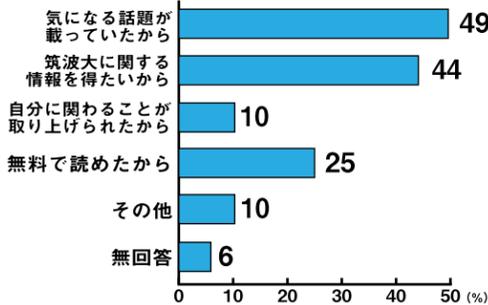


## 筑波大学新聞の記事を読んだことがあるか



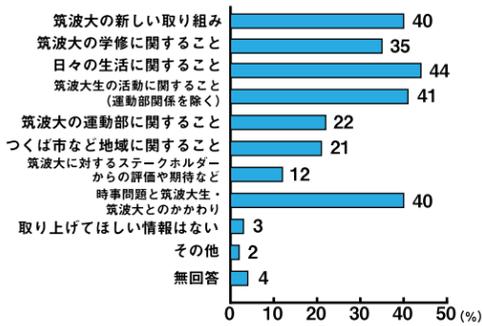
## 筑波大学新聞の記事を読んだ理由は

(大学新聞を読んだことがあると回答した68人が対象、複数回答可)



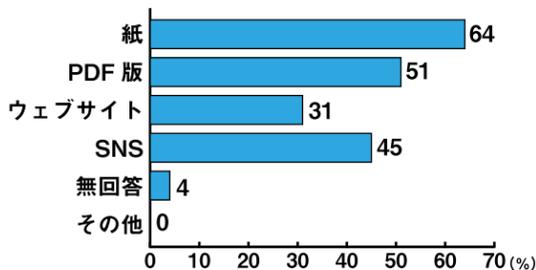
## 筑波大学新聞で取り上げてほしい情報は

(複数回答可)



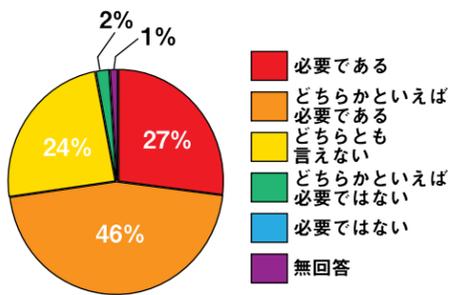
## 筑波大学新聞の情報提供形態として良いと思うもの

(複数回答可)



回答者(100人)の学年  
 1年生…33人  
 2年生…26人  
 3年生…10人  
 4年生…14人  
 5年生…0人  
 6年生…0人  
 大学院生 15人  
 その他(研究生、特別聴講学生など)…2人

## 筑波大学新聞は必要か



**有識者に聞く 本紙の今後**  
 アンケート結果も踏まえ、本紙の果たすべき役割や情報提供形態の在り方について、本紙元編集長で現朝日新聞記者の中田絢子さん(平成18年度比較文化学類卒)と、若者の情報行動やメディア分析が専門の松林麻実子講師(図情学系)に聞いた。(聞き手・横山心咲、金慧欣)



中田絢子さん

アンケートは今年8月に中央図書館前などで対面実施し、オンラインでも回答を募った。有効回答者はそれぞれ40人と60人の計100人。二つの形態の回答を合わせて集計した。「筑波大学新聞の記事を読んだことがあるか」との問いに「はい」と答えたのは68%、「いいえ」は32%だった。また、「はい」との回答者に本紙を読んだ理由を尋ねたところ、「気になる話題が載っていた」が49%、「筑波大に関する情報を得たい」が44%、「自分に関わる情報が取り上げられたから」が25%、「無料で読めたから」が10%、「その他」が10%、「無回答」が6%と回答した。

「紙」が64%で最も多く、「PDF版」が51%、「ウェブサイト」が31%、「SNS」が45%、「無回答」が4%、「その他」が0%と回答した。

「紙」が41%で続いた。「日々の生活」では学生宿舎や学生食堂の話題「筑波大生の活動」では課外活動の情報を知りたいという意見などが多かった。

本紙の情報提供について、次いで51%が「PDF版」と答えた。「ネットが気軽に読めること」が理由が多かった。本紙が44%で最も多く、「紙」が64%で最も多かった。

**「日々の生活」に関心高く**

理由としては「手に取りやすい」「物理的に手元で掲載されているが、回答者には存在を忘れたくない」との意見が多かった。「紙は時代遅れだ」という見方もあった。

一方、「紙は時代遅れだ」という見方もあった。次いで51%が「PDF版」と答えた。「ネットが気軽に読めること」が理由が多かった。本紙が44%で最も多く、「紙」が64%で最も多かった。

**学生への利益代弁を**

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

**本徳亜矢子さん**  
 アクセンチュア セールスマネジング・ディレクター

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

**SNS活用し認知度向上を**

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

「なせI社にそれほど長く勤めているのですか」  
 「社内外の人によく聞かれる質問です。私は筑波大大学院修了後、25年間同じコンサルティング会社で働き、今はマネジング・ディレクターとして多くのお客様の経営改革を推進する役割を担っています。」

# インカレ女子団体2位 渡部 平均台優勝 けがから復調

全日本学生選手権(インカレ)が8月23〜26日に西原商會アリーナ(鹿児島市)で行われ、筑波大女子は団体で準優勝した。また、渡部葉月(体専2年)が個人総合で3位に入った。種目別では渡部が平均台で優勝し、段違い平行棒で3位となった。山本七海(同1年)は同種目で2位だった。男子は団体で8位、上田悠太(同3年)が種目別吊り輪で3位と健闘した。



試合後にやり切った表情を見せる選手ら=体操競技部提供

## 体操



なった。

その後も筑波大は着252・463点を挙げ、

同大会は男女とも各校最大6人で1チームを編成。団体総合は各項目上位5人の合計点を争った。また、各種目での得点がそのまま個人総合、種目別での得点として扱われた。

女子の最初の種目は段違い平行棒。主将の堀端香(同4年)が着地で失敗したものの、他のメンバーでミスを防ぎ、チームで優勝を挙げた。

続く平均台は渡部の得意種目。ロングスタートから後方伸身宙返りを決めると、ほぼ完璧な演技で13・500点を挙げ、全体の1位となった。

実には得点を重ねて総合直前の同年8月、練習中に左膝の靭帯を損傷。同選手権やインカレを欠場していた。その後も、今年4月の全日本選手権で予選敗退するなど結果が出ない時期が続いたが、復調を印象付けた。

今大会を振り返り、渡部は「けがをせず、チームで楽しく演技することを意識した。11月の全日本団体選手権で優勝できるような、演技の精度にこだわった練習をしていきたいと話した。

また、渡部は「主将としてメンバー一人一人の状況をしながら声掛けしてきた。試合と同じ形式で練習を繰り返して足を使って攻め、メンを本負けを喫した後に、竹ノ内佑也(警視庁・平成28年度体育専門学群卒)が副将に登場。試合開始直後に

メンを奪われたが、コトとメンを連取して逆転勝ちし、5大会連続17回目の優勝を決めた。

川合は女子団体戦の予選リーグ2試合と決勝トーナメント1試合に出場。全試合で勝利し、日本の優勝に貢献した。女子団体戦の決勝は男子と同様に韓国と対戦。相手に一本も許さずに勝利し、9大会連続9回目の優勝を果たした。

松崎は「世界選手権に向けて基礎基本を見直して稽古を重ね、団体優勝に貢献できた。無事に終わって、正直ホッとした。次回も出場し、団体戦連覇と個人戦のリベンジを目指したい」と語った。

川合は「憧れの舞台に立つことができ、信じられない気持ちだった。今年度は学生生活最後の年となる。今回の経験を生かし、全日本女子学生優勝大会での2連覇と全日本女子選手権の優勝を狙いたい」と振り返った。

【三協フロンテア柏スタジアム(千葉県柏市)で、川上真生(社会学類3年、山本貴世(国際総合学類2年、12面に関連記事)天皇杯全日本選手権3回戦が7月10日、三協フロンテア柏スタジアム(千葉県柏市)で行われ、筑波大はJ1柏レイソルと対戦。延長戦にまでもつれ込む善戦を見せたが、1-2で惜敗した。

筑波大は6月の2回戦でJ1首位(当時)のFC町田ゼルビアに勝利し、3回戦に進出した。

試合開始早々は筑波大が主導権を握ったが、次第に柏の攻めにさらされるようになり、同16分に失点。前半は0-1で終えた。

後半に入ると柏がFW細谷真大など主力選手を投入し、攻勢に出た。しかし、GK佐藤瑠星(体専3年)が好セーブを連発するなど筑波大もひるまない。そして後半35分、途中出場のMF高山優(同4年)がコーナーキックをクロスに入れ

ると、相手のオウンゴールを誘い同点に追いつく。だが延長前半10分、コーナーキックからのクロスに走りこんだ細谷に頭で決められ、勝ち越しを許す。同後半のアディショナルタイムにはMF竹内崇人(同4年)がゴール前からシュートを放ったが、ゴール枠を外れた。試合はそのまま終了し、7年ぶりの4回戦進出はかなわなかった。

監督の小井土正亮准教授(体育系)は「正々堂々、筑波大らしく本気で戦っていたが、一人一人の力がまだまだ足りなかった。選手たちにとってプラスの経験になった」と話した。

関東大学サッカーリーグの第13節で筑波大は8月3日、筑波大学第一サッカー場(つくば市天久保)で明治大と対戦し、0-2で敗れた。筑波大は勝ち点29で首位を維持した(8月10日現在)。ものの、試合数が一つ少ない明治大に勝ち点1差に迫られた。

試合は立ち上がりから明治大に主導権を奪われた。前半開始1分のPKはGK佐藤瑠星(体専3年)が止めたが、同18分にはロングボールからの相手の攻めを止められず失点。なかなかシュート機会を得られないまま前半を終えた。

後半も明治大の攻勢が続

いた。後半54分に角昂志郎(同4年)がドリブルで敵陣に入るなど、チャンスは芽は作るものの、ゴールには至らない。終了間際に追加点を奪われ、そのまま0-2で試合は終わった。

この試合は筑波大のホームゲームで、1試合限りのスポンサー「マッチパートナー」が初めて導入された。パートナーとなったのは関西や東京、名古屋などで不動産業などを展開する「ウィル」(本社・兵庫県塚本)で、2000人を超える観客が集まった。

会場には「熱狂」と書いた横断幕が飾られ、試合後は花火も打ち上げられた。

監督の小井土正亮准教授(体育系)は「惜敗だったと振り返り、主将の福井啓太(同4年)は「一球際で競り負け、セカンドボールも拾えなかった。次の試合でリベンジしたい」と話した。(勝原経太(社会学類2年

# 世界選手権 松崎は団体世界一 個人2位 川合は団体優勝に貢献

3年に1度の世界選手権が7月4〜7日にイタリア・ミラノで開催され、日本は男女団体と男女個人戦の全4部門で優勝を果たした。松崎賢士郎(体育2年、現体育系特任助教)が男子団体優勝に、川合芳奈(体専4年)が女子団体優勝にそれぞれ貢献し、松崎は個人戦でも準優勝した。男子個人戦の優勝は星亨啓太(警視庁・令和2年度体育専門学群卒)だった。

## 剣道



戦に入った。

松崎の足が止まった一瞬に

星亨に引きメンを打ちこま

剣道世界一を決める同大会には62の国・地域が参加した。日本代表は男女とも10人で、松崎は男子団体戦と個人戦、川合は女子団体戦に出場した。

大会は4日に女子個人戦、6日に男子個人戦、7日に男女の団体戦決勝トーナメントが行われた。

男子個人戦の準決勝はいずれも日本代表同士の対戦となった。松崎は木村恵都(大阪府警察)と対戦。メンとトウを取り合った後、松崎がメンを決めて決勝に進出した。

決勝の相手は大学で同期だった星亨。お互いに攻め込むも一本を奪えず、延長

戦に入った。開始約1分、松崎の足が止まった一瞬に星亨に引きメンを打ちこまれ、試合は決着した。

女子個人戦は近藤美洗(警視庁)が優勝した。男子団体戦の決勝で日本は韓国と対戦した。先鋒戦は星亨が一本勝ちした。次鋒の松崎も、取り返そうと攻め込んでくる相手に対し



賞状やトロフィーを持って並ぶ松崎(左から2番目)ら男子日本代表=本人提供

て足を使って攻め、メンを決めて勝った。中堅戦で二本負けを喫した後に、竹ノ内佑也(警視庁・平成28年度体育専門学群卒)が副将に登場。試合開始直後に

メンを奪われたが、コトとメンを連取して逆転勝ちし、5大会連続17回目の優勝を決めた。

川合は女子団体戦の予選リーグ2試合と決勝トーナメント1試合に出場。全試合で勝利し、日本の優勝に貢献した。女子団体戦の決勝は男子と同様に韓国と対戦。相手に一本も許さずに勝利し、9大会連続9回目の優勝を果たした。

松崎は「世界選手権に向けて基礎基本を見直して稽古を重ね、団体優勝に貢献できた。無事に終わって、正直ホッとした。次回も出場し、団体戦連覇と個人戦のリベンジを目指したい」と語った。

川合は「憧れの舞台に立つことができ、信じられない気持ちだった。今年度は学生生活最後の年となる。今回の経験を生かし、全日本女子学生優勝大会での2連覇と全日本女子選手権の優勝を狙いたい」と振り返った。

# 国際試合で記者体験 小学生が選手ら取材

【洞峰公園(つくば市二の宮)で、横山心咲(比較文化学類2年、山本貴世(国際総合学類2年、惣田堅斗(心理学類1年)体育スポーツ局主催の筑波大ホッケーゲーム「TSUKUBA LIVE!」が8月31日に開かれ、女子バレーボール部がカナダの強豪アルバータ大と対戦した。試合は筑波大が3-1で勝利した。試合に合わせて同局主催の「小学生新聞記者体験会」も開かれ、つくば市内の小学生2人が参加した。2人は選手へのインタビューや写真撮影を体験した。

## 本紙編集部が協力

## バレー



本紙編集部の協力の下、初

記者体験会は「TSUKUBA LIVE!」をより地域に密着したものとして、体育スポーツ局が

本紙編集部の協力の下、初めて実施した。

参加者は同市立九重小6年の矢口りんさんと同じく瀬戸あさひさん。2人は友人で「夏休みの思い出作り



選手にヒーローインタビューをする矢口さん(右)(8月31日、洞峰公園で) =惣田堅斗撮影

をしようと思ったという。試合会場には選手と一緒バレーボール体験ができるブースや、家庭で余っている食品を持ち寄り地域の福祉施設などに寄付するフードドライブのブースなどが設置された。

2人は試合の前夜やハイタイムに取材に駆け回るブースや、家庭で余っている食品を持ち寄り地域の福祉施設などに寄付するフードドライブのブースなどでは「どれくらい食べ物が集まりましたか?」などと質問。試合中は、本紙編集部員が取材に協力した。

また、試合後は、女子バレー部監督の中西康己准教授(体育系)や活躍した選手たちにインタビューした。

瀬戸さんは「カメラで写真を撮るのも質問を考えるのも難しかった。新鮮な体験ばかりでとても楽しかった」と振り返った。矢口さんは「入前インタビューするのは緊張したが、気さくな選手ばかりで、身近に感じた」と笑顔で話した。

本紙は2人が書いた原稿をもとに紙面を編集し、後日郵送する予定だ。

# 鵜澤2000メートルで優勝 インカレ総合男女とも2位



学生最後のレースで優勝した鵜澤(9月22日、Uvanceとどろきスタジアム by Fujitsu) = 川上真生撮影

【Uvanceとどろきスタジアム by Fujitsu(川崎中原区)で兼平麻衣比較文化学類1年、川上真生II社会学類3年】日本学生対校選手権(インカレ)が9月19〜22日に開かれた。筑波大は鵜澤飛羽(体専4年)が男子2000メートルの2度目の優勝を果たし、女子棒高跳で村田蒼空(同2年)が準優勝するなど男女計21種目で延べ32人が入賞した。総合順位は男女とも2位で、男子は昨年の5位から大きく順位を上げた。

## 陸上



パリ五輪セミアイナリートの鵜澤は準決勝3組で3着となり、着順通過は逃したが、タイム順で決勝進出を決めた。学生最後のレースとなった決勝では、カーブが急な1レーンからのスタートだったが、最後の直線でトップに立ち20秒64でゴールした。鵜澤はこの前に男子1000メートル(予選、準決勝、決勝)と400メートル(予選、決勝)を走っていた。「準決勝で失敗してしまふ肝を冷やしたが冷静に自分の走りをする」と意識した。疲労もあった中、厳しい状況でも勝つ切の勝負強い走りが出てきたと思う。最後のインカレで優勝できてうれしい」と汗を拭いた。男子やり投では、慶応作(同4年)が75.75で準優勝した。昨年は10位だった。最後のインカレで躍進した。慶は「自分の投げに集中できれば結果が残せる」と言っていた。

回とも失敗に終わった。村田は「助走と踏み切りが安定し、優勝争いに絡めたことは自信になった。踏み切りを強化し、記録を伸ばしたい」と振り返った。8月のU20世界選手権(ベル)女子3000メートルに出場した鈴木美海(同1年)は女子1500メートル決勝で4位となった。残り500メートルでスタートし、一時は先頭に出たが、終盤にかわされ4分24秒73でゴールした。鈴木は「自分から仕掛ける積極的なレースを展開できた。ラストパートの走力を鍛えていきたい」と振り返った。また女子走高跳の前西咲良(同1年)が4位入賞するなど、女子は計11種目で延べ19人が入賞した。今大会のチーム目標は男女アバック優勝だった。主将の二見輝輝(同4年)は「目標を達成できなかった悔しさはあるが、多くの選手が実力を発揮してくれて、後輩たちには、楽しみながら競技と対校戦に打ち込んでほしい」とエールを送った。

# インカレ 女子50メートル自由形 1年溝口が3位

## 水泳競技

【東京アクアティクスセンター(東京都江東区)で山本貴世II国際総合学類2年、壬生奏太II地球学類1年、金慧欣II知識情報図書館学類2年】日本学生選手権(インカレ)が9月5〜8日に行われ、溝口歩優(体専1年)が女子50メートル自由形で3位となった。更に、高橋奈々(同4年)が女子100メートル平泳ぎで4位に入るなど、筑波大勢は男女計8種目で延べ21人が入賞した。

溝口は「目標タイムに届かず悔しいが、メダル獲得でチームに貢献できた。スタートから15秒までの速さを改善し、来年のインカレでは24秒台で優勝を目指したい」と話した。◆ 全国公立大学選手権は8月9〜11日にインフロンア草津アクアティクスセンター(滋賀県草津市)で行われた。筑波大勢は男子が6種目、女子は8種目でそれぞれ優勝し、男女とも総合優勝した。(壬生奏太)

# 悲願の団体初優勝 殊勲賞に牧野



卓球レボコトバクワライ

準々決勝の愛知工業大戦で勝利した青井(左)と牧野

## 卓球



全日本大学総合選手権(インカレ)団体の部が7月4〜7日に大浜たいしんアリーナ(堺市堺区)で開かれ、筑波大女子が初優勝を果たした。シングルスで無敗だった牧野里菜(体専1年)が殊勲賞に輝いた。男子は8位だった。(大竹翔II文学類1年)

インカレの団体戦は1複4単(1ダブルス、4シングルス)形式で、先に3試合を奪ったチームが勝利する。第3試合がダブルス、残りはシングルスとなる。筑波大女子は予選リーグを無敗で突破し、決勝トーナメントとなる第2ステージに進出。準々決勝で昨年優勝の愛知工業大と対戦した。第1、第2試合を奪われ追い詰められたが、第3試合のダブルスで勝利して流れを変えると、続く第4、第5試合も奪って大逆転勝利した。ダブルスに出場した主将の青井さくら(同2年)は「チャレンジャーとして思い切ってプレーに臨んだ。ダブルスで勝利をつかみ、仲間にバトンをつなげてよかった」と話した。準決勝では同志社大が立ち上がった。第1試合の上澤美央(同9年)は1-3で敗れたが、第2試合から第4試合までストレート勝ちし、決勝へ駒を進めた。決勝は春季関東学生リーグ優勝の強豪、専修大との対戦となった。第1試合で中田絵梨奈(同4年)は昨年の個人インカレ王者、出澤杏佳を3-1で下し、チームは勢いに乗る。続く第2試合で青井がフォアハンドを得意とする相手の動きを封じてストレート勝ち

# スポーツの顔

## ハンド

し初優勝に主手をかけた。第3試合の青井・牧野ペアは過去に勝利経験のない相手にストレート負けしたが、第4試合の1年生ルーキー牧野が大活躍。対戦経験のない相手だったが、得意のバックハンドで抑え込み、2ゲームを連取。第3ゲームはジュースにもつれ込む接戦となったが、ストレートで勝ち切り、団体初優勝を決めた。青井は「日々の練習を通じて入念な準備をし、メンバーへの声掛けを通じてチームの団結力を向上させたことが優勝につながった」と振り返った。シングルス無敗の快進撃を見た牧野は「全勝には後から気づいた。それくらい集中してプレーすることができた。得意のバックハンドの技術を伸ばしつつ、守りの精度も高めていきたい」と意気込んだ。

ゴール前へ切り込み鋭いシュートを放ったかと思えば、相手の動きを睨んだパスカットで攻撃を封じた。攻守でチームに貢献する左利きの右バックだ。今年の関東学生連盟春季リーグ戦ではチームの3連覇に貢献し、優秀新人賞に選ばれた。石川県小松市出身。小学3年の時、姉と兄が所属する地元クラブで競技を始めた。同5年時から右バックを務めている。右バックは、右サイドで受けたボールをゴール前に運び、シュートにつなげるポジションだ。右利きより利き腕がコート中央に近い左利きの方が、ゴールを狙いやすい。



# 春季リーグで優秀新人賞 紺谷利紗 (体専2年)

ら素早い攻撃を展開し、他校を圧倒。春の全国中学生選手権と全中で優勝を果たした。また、チームのプレーを見守った同

ドボールができることは当たり前ではないと思いついた」と振り返る。卒業後は自主性を尊重する。◆ 当面の目標は、関東学生連盟秋季リーグの全勝優勝と全日本学生選手権(インカレ)の制覇だ。その先に、日本代表という夢の達成がある。(川上真生II社会学類3年 写真は本人提供)

# 広い視野でチームに貢献

入学金直後から試合に出場し、1年時の関東学生連盟春季リーグではチームで最も多くシュートを放った。成功率は低かったが、「対一の状況からフェイントで相手をかき自分の強みは出せたい」と語る。

# Who's Who?

蹴球部ヘッドコーチ

## 戸田伊吹 さん (体専4年)



ピッチサイドで選手に指示を出す戸田さん

今年6月のサッカー天皇杯2回戦でJ1首位(当時)のFC町田ゼルビアを破り、日本サッカー界を沸かせた蹴球部。同部史上初の学生ヘッドコーチとして試合の指揮を執り、シャイアントキングの立役者となった。

「非日常的空間だった。貴重

な体験させてくれた監督と選手たちに感謝したい」と語る。5歳でサッカーを始めた。茨城県牛久市出身で、小学生時の所属クラブの練習場所が筑波大学第一サッカー場だった。現日本代表でベルギー部リーグ・シントトロイデン所属の谷口彰悟選手(平成25年度体育専門学

群卒)らが練習する様子を見近に見て、「筑波大でプレーしたい」という思いを募らせた。

中学でJ1柏レイソルのジュニアユースチームに加入し、高校3年時はユースチームの主将になった。だが、コロナ禍で大会は軒並み中止となり、思うような活動ができない中で、「元々持っていた指導者への興味が高まった」という。

高校卒業後は筑波大へ進学。幼いころの夢をかなえると、1年時春からトップチームに入り、センターバックやボランチとして活躍した。当時からチーム全体のバランスを見ながらプレーすることが持ち味だった。

だが、転機はすぐ訪れた。夏ごろにけがで戦列を離れた。自分の将来を見つめ直す中で、指導者に転向することを決めた。「今決断すれば、早くから現場で経験を積める。大学生だからこそチャレンジできる」ともある。今まで出会った指導者たち

## 日々自分をアップデート

### J1破った学生指揮官

は素晴らしい人ばかりだった。自分もそうなりたかったと思ったし、一緒に仕事をしてみたかった」と振り返る。

睡眠や食事配りに気をつけていた生活は一変した。毎日、寝る間を惜んで試合や対戦相手の分析に明け暮れ、研究室で大学院生とコーチングについて語り合うようになった。

3年時には現仙台大監督の平山相太ヘッドコーチ(当時、令和5年度体育学位プログラム修了)の下でアシスタントコーチを務めた。練習のサポートや対戦相手の分析を一緒にやり、チームを作り上げる難しさややりがいを感じた経験が、指導者としての土台になったという。

そして4年生になり、小井土正亮監督からヘッドコーチを託された。練習メニューから試合でのメンバー編成まで、監督と同等の全権を持つ立場だ。

コーチとして心掛けているのは、選手との双方向性を保つこ

と。試合前のミーティングなどで、選手が意見を言うように働きかけている。「主体性が高く、戦術を考えることが好きな選手が蹴球部には多い。意見を出しあい、互いに補うことでより良いチームになる」と語る。

7月の天皇杯3回戦では柏レイソルに1-2で惜敗した。相手チームにはユース時代に切磋琢磨した仲間もいた。「力不足を感じたが、J1相手に采配を振るった経験は大きな財産になった。必ずまたこの舞台に戻ってきたいと思った」と意気込む。

残された今季の目標は関東大学リーグの連覇と8年ぶりの全日本学生選手権(インカレ)優勝だ。また、指導者としての明確な目標はない。だが、「挑戦したいものが見つかった時にすぐ飛び込めるよう、日々自分をアップデートしていく」と向上心を絶やさない。

(山本貴世II国際総合学類2年 写真は本人提供、10面に関連記事)

## 聞こえないことと感じさせない

「スターバックスコーヒー筑波大学中央図書館店」のアルバイトパートナー(従業員)、渡邊莉央さん(筑波技術大3年)は聴覚障害があるが、指さしボードなどを使って客とやり取りし、スムーズに接客をこなす。「手話で『ありがとう』と伝えてくれるお客さんもいて、仕事が楽しい」と渡邊さん。ストアマネージャー(店長)の杉淵広美さんは「聞こえないことを感じさせない仕事ぶりだ。一緒に働き、言葉を伝え合う気持ちがあれば障害を乗り越えられると気づいた」と語る。(兼平麻央II比較文化学類1年、横山心咲II同2年、金慧欣II知識情報・図書館学類2年)

### スタバ中央図書館店 聴覚障害パートナー 渡邊さん

スタバには、障害のある人が他の従業員のサポートを受けながら働く「チャレンジャーパートナー」制度がある。渡邊さんはスタバの他店舗で働く聴覚障害者の友人から「お客様とやり取りでき、やりがいを感じる」と聞き、今年2月から中央図書館店に働き始めた。勤務は週3日、1回4時間ほど。オーダーを取り、レジで会計処理をするなど主に接客を担当する。

接客では飲み物のサイズやトッピングなどが書かれた指さしボードを活用。読唇や筆談で他のパートナーとも積極的にコミュニケーションを図っている。



指差しボードを使って注文を受ける渡邊さん(7月29日、スターバックスコーヒー筑波大学中央図書館店) = 兼平麻央撮影

以前はハンバーガー店でアルバイトしていたが、主な業務は調理で、客や他の従業員とは軽くあいさつを交わす程度だった。

渡邊さんは「接客を始めた当初は不安で、なかなか笑顔を見せられなかったが、周囲から『うまくできているよ!』と励まされ、自信になった。業務を円滑に進めるにはホウレンソウ(報告、連絡、相談)を欠かさなかったことが大切だと実感した」と振り返る。

「はい、よかったと思う」と話した。

杉淵さんは今年7月、同店で手話を使って客と会話する「手話カフェ」を開いた。2週間前から店頭で告知し、当日は筑波大手話サークルのメンバーを中心に5人が参加した。スタバ側は渡邊さんと杉淵さんが出席し、参加者と手話で会話した。参加者からは「普段使わない手話を知った」との声が寄せられたという。

杉淵さんは「手話カフェは好評で、次の開催を検討中だ。お店に来た方が、渡邊さんの働く姿を見て、全ての人がいろいろなおことに挑戦できることを考えるきっかけになれば」と語った。

渡邊さんの接客を受けた宮川拓人さん(障害P3年)は「違和感のない対応で、スムーズに注文できた。障害を問題とせずに働ける環境があるの



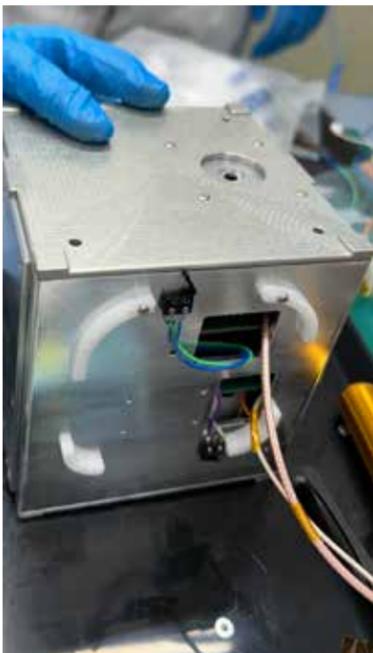
追跡「結」プロジェクト

## 納得できる機体作る

### 打ち上げ延期にめげず

筑波大生が中心の「結」プロジェクトチームが製作している超小型人工衛星「TSUKUTO」の打ち上げが、予定より半年遅れの2026年1月に延期された。今年4月にあった試験機の性能試験で電源関連の基板が正常に動作せず、通信に必要な基板の製作も間に合わなかったためだ。「自分たちがより納得できる機体作りができる」と学生代表の松島恵悟さん(工シス2年)は延期を前向きに捉えている。

松島さんによれば、打ち上げ予定を3カ月延ばせば機体を完成させられる見通しもあったが「試験を重ね、自信のあるものを作りたい」と6カ月の延期を決めた。「結」のメンバー全員が「完成



動作試験中の試作機 = 「結」プロジェクト提供

から製作を進めている。期限が延びたことで、新しく学べるものが増え、むしろ楽しい」と語る。

今後は10月末までに、機体の強度や宇宙空間で機器が動作するかを試作機で確認し、問題がなければ実機の製作を始める予定だ。

一方、今年6月から実施したクラウドファンディングでは、目標の50万円を大きく上回る約230万円の活動資金が集まった。支援者157人には、製作している衛星をデザインしたキーホルダーなどを返礼品として送った。

支援者からは「星空を見る楽しみが増える。未来の技術者たちの挑戦を応援する」などの声が寄せられており、プロジェクトマネージャーの遠藤こまちさん(工シス3年)は「衛星開発に興味を持ってくれる人が増え、うれしい」と話している。

## 編集後記

筑波大学新聞は10月に創刊50周年を迎えました。その記念号をお届けいたしました。▼日本大、東京大、一橋大の大学新聞編集長らを招き大学新聞の在り方について語る座談会(8面)では、大学新聞の目指すべき姿やメディアのオンライン化が進む現代における紙の新聞の役割について考えさせられました。筑波大100人に大学新聞について聞いたアンケート(9面)では、本紙を「必要だ」と言ってくれる声の多くに励まされました▼本紙は取材、記事(記者・新田早紀II生物資源学類4年)

学生が行っています。主要な読者である筑波大生の暮らしは常に紙面の中心でした。創刊以来の編集部員の声や紙面を飾った学生たちの声を振り返った特集(6-7面)は、本紙が筑波大の歴史の目撃者であったことを教えてくれます▼パブリック・パブリックでは、筑波大勢が活躍しました(5面)。マレーシア校開校(1面)や三井住友フィナンシャルグループとの連携協定(1面)など筑波大の変革が続いています▼本紙はこれからも筑波大の新たな歴史を追い続けます。ご愛読をお願いいたします(記者・新田早紀II生物資源学類4年)

筑波大学新聞編集部  
▼編集代表II鴨志田公男(筑波大学・教授IIサイエンスコミュニケーション)  
▼編集長II川上真生(社会学類3年)▼副編集長II山本貴世(国際総合学類2年)▼青野心平(物理学類2年) ほか編集部員22人

次号は  
**12月18日(水)**  
発行予定です

発行所II筑波大学  
印刷IIリフコム